

「ああ。国や地域によつて米だとか葡萄だとか、酒にも色々種類がある。果物がよく使われるが、ここいらは麦だ。まあ一杯飲んでみな」

チュンオウが飲んでいたのは何だつたのだろうか。それは分からぬが、酒にも色々あるらしいので、一口だけ飲んでみることにした。

男が陶器のカップに注いだのは、琥珀色の綺麗な液体だつた。トゥラスは舌で一滴舐めとつた。ふわっと口の中に苦味とも甘味とも言えぬものが広がる。それはすうっと鼻孔を通り抜けて広がつた。

確かに前飲んだものと印象はだいぶ違う。

同じ酒という名でくくることに違和感を覚

えるほど、こちらのものは前よりいくらも飲めるものだつた。しかし、進んで飲もうとは思わない。

「まずくはないが、うまくもない」

トゥラスは複雑な顔で、男にカップを返した。男は大笑いで「酒には弱いのか！ 勝負は酒の飲み比べにすればよかつたな！」などと言う。それはまつびらごめんだ。

「それなら、酒の代わりにこれをやろう」

男は、自分の胸に下げていた首飾りを取り、トゥラスに差し出した。細長い楕円に、不思議な模様が刻みこまれている。模様は不均一で、不揃いだ。一つひとつ形が違う。そういうものは、模様というべきではないのかも知れない。

「なんだこれ？」

「さあな、よくわからねえ」

男は自分の頭を叩いて、「こっちの方は弱いんでね」と笑った。

「昔、親父からもらつたもんだ」

「そんな大切なものの、もらつていいのか？」

「かまいやしねえ。別に見てて綺麗なもので
もねえし、そこの店の親父にはなんの値打ち

こともねえって買つてもらえなかつたからな」

装飾武具の店主の笑い声が聞こえた。トウラスは受取つて胸に下げ、右手を差し出した。
「ん？ なんだ、足りないか？」

「いや、違う。信頼と和解の印、握手つてや
つだ」

どうしていいかわかつていなない男の右手
をとり、二度ほど振つて離した。

「これだけだ」

きよどんとしていた男は、にかつと笑つた。

「そうか、お前さんの国のかいさつか！ 握

手つてんだな。覚えておこう
それから、男は野次馬に叫んだ。

「お前ら道開けろ！ 通れねえだろうが！」

ようやく道が開け、トウラスは最後に「あ
りがとう」と言つてその場を後にした。

人だから抜ける時、野次馬たちから色々
なものを山のように渡された。勝利の祝いだ
という。果物や穀物、旅には欠かせない干物
や燻製。市場を抜けた時には両手がいっぱい
になつていた。

トウラスは最後に豆をくれた男を呼びと
めて、その豆を先ほど木の実を取り上げてし
まつた女に渡してくれと頼んだ。

「渡せつたつて、誰だかわからねえよ」

そう言われたので、しばらく市場を見まわ
して女を探した。適当にそれらしい女を見つ
けて、「多分あれだ。頼んだぜ」と言い残し

て早々に港を目指した。

目印にしていた港の灯台の下へ行くと、こ

ちらに気づいたチュンオウが目を丸くした。

「トゥラス、それは一体どうしたのだ！」

抱えた荷物の間から見えるリビも、珍しく

驚いた様子だ。

「なんだ、その荷物は……！」

「俺もなんだかよくわかんねえけど、もらつた。それより手伝ってくれよ」

麻袋の一番上で今にも転げ落ちそうな果

リビが疑わしい顔でこちらを見る。

「馬鹿言え！　俺はそこまで常識がないわけじゃない」

物を、リビがいくつか取ってくれた。これでようやく普段通りに歩ける。それでも大きな麻袋二つを抱えるのは面倒だ。後で紐を通じて、背負えるようにしてしまおうとトゥラスは考えた。

「それにしても、あの粗悪な玉三つでこれだけのものに変えてくるとは……」

「なんだよ爺さん。やっぱりあれは安物だったのかよ」

あの店主の目は正しかったようだ。先にそれを教えてくれたなら、あんな面倒な交渉はせずに済んだものを。相応のものを選べたはずだ。

「お前、まさか盗んだわけではないだろ？」

リビが馬鹿言え！　俺はそこまで常識がないわけじゃない

睨みを利かせて言つたがいつも通りリビには少しも効かず、肩をすくめてため息などついてくる。この男はどうも気に食わない。だがそんなりビも、トゥラスの荷物をまじまじと見てからこう言つた。

「あの石でこの量を交換してくるとは、確かにすごいな」

珍しくそのように言つてくるのに気分は悪くなかったが、トゥラスはそれを喜ぶことはできなかつた。よく分からぬ喧嘩に勝つて得たものだ。リビは腕の力ではなく言葉で説き伏せて、少ない価値の物で多くの品を得る。人間相手ならば、言葉だけでどうにかしてしまうリビの方がよっぽどすごいと思つた。だが、本人には絶対に言わないでおこうとトゥラスは決めていた。

「では、明日の船へ行こう。今日は船乗りたちと、船の上で夜を明かそうぞ」

チュンオウが先頭で、港のとある船に乗り込んだ。もう話はつけているようで、船乗りたちはすぐに船の中へ案内してくれた。早朝の出立の準備を手間取らせないためにも先に船に乗つておこうという考え方である。

チュンオウはリヨウキを繋ぐと、船乗りに用があると言つて外へ出てしまつた。それを見送つて、リビはこの入江の波に揺れる船に腰を下ろした。そして案内された時に手渡さ

分らが乗る場所があるのであらうかとトゥラスは船の中を見回したが、結局ランプで照らされた場所は、荷物の間の小さな隙間だつた。大きな隙間はリヨウキが埋めてしまつたのだ。

「貿易船に無理を言つて乗せてもらうのだ。乗れるだけありがたいと思え」

リビがそう言つてくるので、「何も言つてねえだろ！」とついつい言い返してしまつた。

明らかに無知で幼稚だと見られてゐるようであ腹が立つ。しかしその苛々を溜めておくのも嫌なので、わざとらしい大きなため息で吐き出してやつた。

れたランプを適当な場所に置き、市場で買った書物を広げ始めた。

トゥラスもその脇に座った。そこから覗いた書物には、不思議な文字がびっしりと敷き詰められていた。

「これは文字か？」

書物に目を落としたまま、リビは「そうだ」と軽く頷いた。これを文字と呼ぶのはトゥラスには不思議な感じがした。不思議な絵のようなもので、さっぱり読むことができない。ここはそれほど明るくないので頭の邪魔なフレドを脱ぎ払い、書物に真剣に目を落としているリビに訊ねた。

「読めるのか？」

「今解読しているところだ。古い文献だから、文字の意味から探らねばならない。お前には到底読めぬだろうな」

「なんだよその言い方は！　俺だって少しくらい読み書きはできるぞ」

「そうなのか？　ならば書いてみろ。お前が文字を書くとはなかなか興味深い」

リビは皮肉を言つてローブの内側から大きな羽を取り出し、インク壺を出した。受取

った羽は、よく見ると先端が割つてあつた。トゥラスが養母から習つた時は、木の枝や植物の茎を使つていたのだ。チュンオウが持つているものは、馬の尾の毛を束ねたもので形容書き味も違つて驚いた。それを思うと、こちらの羽の方がいくらか自分の使つていたものに近かつた。

「ここに何か書いてみろ」

リビが、トゥラスが市場でもらった荷物の麻袋を指した。麻なので書きにくいが、大きく書けばそれなりに読める。

「トゥラス……ホピネサリア？」

「俺の名前だ。ほら、ちゃんと文字は書けるだろ」

だがリビは、思いもよらぬ言葉を返してきた。

「お前、この先の遊牧民族の生まれか？」

「……なんだ、突然？」

物心ついた時には森にいたので、自分で

ら出生地などわからない。養母もそれは語れないと言っていた。今更知りたいとも思わないし、自分から出生地を探そななどとは毛頭考えていない。しかしそんな風に言わると、気にはなる。

「ホピネサリア……。この響きは聞き覚えがある。多分、ホピネス族の末裔なのだろうな」

「ホピネス族？」

第三章 世界を知るということ

確かに、響きは似ている。

「ホピネスとは自由の民という意味があるらしい。この辺りで遊牧を始めた民族だ。末裔のほとんどはヒエミチリアスに住んでいるが、今では遊牧も半ば廃れたと聞く。お前の生みの親は、もしかするとヒエミチリアスにいるのかもしれないな」

「へえ」

それだけの返事で済ませたので、リビは怪訝な顔をした。

「自分のことなのに、興味はないのか？」

「まあな。俺の故郷は森だし、家族なら兄弟の虎たちがいるからな。一応子供の頃はばあ

さんに育てられて、そのばあさんが俺の母親みたいなもんだったから。それに悪魔の子だなんて言われて捨てられたんだ。行つたって歓迎されないなら、今更生みの親だと生ま

れの土地だとか、そういうのは探そそうとは思
わねえな」

あまり納得していないような顔で、リビは
嘆息した。だが、ふと顔つきが変わる。

「お前、それはどうした？」

リビがこちらの胸元を指さす。何かと思つ
て見下ろしてみると、そこには市場でもらつ
た胸飾りがあつた。

「ああ、さつきデニアの市場でもらつたんだ
よ」

リビがあまりに真剣にそれを見るので、外
して渡してやつた。受取つて、刻まれた模様
を穴が開くかと思うほど見ていたリビは、何
を思い立つたのか、そこに広げてある書物と
胸飾りを交互に見た。そして、大きく吐息
をもらした。

「トゥラス、お前はすごいな。一体誰からこ
森羅万象の子

第三章 世界を知る

「酒屋の親父だ。価値も無いし綺麗なもので
もないからやるって言われた」

「価値がないだと！」

呆れ顔で、リビは嘆息した。

「これはとても貴重なものだ。古代文字が音
の順で並んでいる。識字者が今よりずいぶん
少ない時代に、きっといつでも文字を読める
ようにこれを携帯していたんだな」

リビは手の中の胸飾りに目を落とした。

あの不均一な模様に見えたのは古代文字
だったようだ。そう言われてみると、親指ほ
どの大きさしかないただの胸飾りにも歴史
というものを感じる。ずいぶんと昔を生きた、
まだ文字を覚えきれていない人がこれを持
ち、今まさにリビがしているように文書の文
字と照らし合わせながら解説していたのだ。

「それ、お前にやるよ」

「いいのか？」

「ああ。俺には必要ないだろう。お前に持つ

ててもらつた方が役に立つだろうしな」

「ならばありがたくもらっておこう」

リビは早速なくさないように胸に下げ、胸

の

それと書物を照らし始めた。

リビがあまりに真剣に書物とやらめっこをしているので、トゥラスは手持無沙汰になつてヒョウビを探した。しかしせっかく遊んでやろうと思ったのに、ヒョウビはすやすや寝息を立てていた。

ずいぶんと身体は大きくなつてきたのに、中身はまだ幼い子虎だ。トゥラスは小さく笑つた。こんな幼い虎が、賢く気高いあの大きな兄弟らのように成長するのはいつのことやらと思いながら、トゥラスはヒョウビのひ

兄弟らと暮らしたあの森は、時に怖ろしい場所ではあつたが、穏やかな世界だった。毎日が食糧を求めるための生活だったが、その時に触れる木々や動物たちは純粹で素直だった。そして自分を含め、彼ら全てがある一定の循環の中で生きていた。

殺生は頻繁だが、それは生きるために必要なこと。食べられてしまえば終わりだが、食べた者は腹を満たされ、それは新しい命を生み出す力となる。

森の中では生と死が一つの無駄も無く巡り、自分もいつしかその中で一生を終えるのだとずっと思つてきた。必死に生きようとはしてきたが、頭のどこかでもしも狼に食われたとしても、それでまた彼らの生きる糧となり森の一部として命尽きるのなら、それもい

げをいじつてやつた。

いと思つていた。

だが、この世界はそんなに簡単ではない。

人間というものは、時に森で生きたトゥラスには理解しがたいことを考える。突然のわけのわからない喧嘩に見物人がやつてきて、やつてしまえと煽る。一体何のために？

たとえばもしも自分があの時男を殺したとしたら、あの男はだれかの食糧になつたのだろうか。まさか。共食いなど森の生き物らも滅多にしないし、チュンオウはそもそも殺人に対しては罰則がある国が大半だとつていた。

考えれば考えるほど、あの喧嘩はよくわからなかつた。結局相手をして勝つてしまつたが、もつと方法はあつたはずだ。人間らしいことができてもよかつたはずだ。それとも、あれが人間らしいことなのだろうか。

第三章 世界を知るということ
 リビに視線を向けると、リビはまた書物に目を落とした。

「落ち込んでるわけじゃねえけど。……ちよつと考え方してた」

「そちらの方が珍しいじゃないか」

むつとしたが、最近こいつはこういうやつのだと割り切れるようになつてきた。世の中には色々な人間がいる。たまにはこういうひねくれたやつがいたって、不思議ではない。それにこいつは多分根本的には悪いやつではない。と、思う。

潮風がどこからか入ってきて、ランプの小さな火が揺れた。トゥラスはその光からは目を反らし、部屋の奥の暗がりに目をやつた。やはり光は苦手だ。

「だんだんお前や爺さんが考へてゐること
が、わかつてきた気がする」

リビが顔を上げた様子が気配で分かつた。

聞く姿勢をとつてくれたのだろうか。

「人間の戦う理由が俺にはわからない。人間の争いつてのは、無益つてやつなんじやないかとだんだん思つてきたんだ。もしそうだとしたら、この世の中の均衡はお前や爺さんが言うように崩れてしまうと思う。俺が生きてきた森では、人間がいちいち自分たちでつくり上げたような規則みたいなものはなかつたが、少なからずそれに似たものはあつた。

森のみんなは誰が注意しなくともそれを充分理解していく、生きるのは大変だつたけど、それなりに仲良くできて居心地は良かつた。

爺さんがこの世界は闇に飲み込まれようと
してゐなんて言つてたけど、その闇つてのは

人間の無駄な争いなんじやないか？ そ
ういうのは、やっぱり世界にはよくないだろ
うお前にしては、なかなか深く考えたじやな
いか」

くすりとリビの息遣いが聞こえた。彼が自分に笑うのは珍しいのでそちらに目をやると、リビは試すような笑みと上目遣いでこちらを見ていた。

「しかし、お前がそんな意見を出すとは思わなかつたな。人間の争いは、本当に無益か？ ならば森の生き物たちも、時に無益な争いをしたのではないか？」

よくわからなかつたので、首をかしげて説明を促した。リビは応えて、わかりやすく碎いて言いなおした。

「動物も縄張り争いをするだろう。他にも、雌をめぐつて雄同士が争つたり……。それら

はお前の言う無益に似ていると思うがね」

「……ああ、そうか」

妙に納得させられてしまつた。人間も国と
いう繩張りを持つてゐる。それを守るために
戦うのは、動物も同じだ。よく考えれば、今
日の市場でのことも、店主が自分の持ち物を
守るが故に引き起こした争いだった。

そんな風にあっさりと肯定してしまつた
トゥラスに、リビは可笑しそうに笑つた。

「納得するのが早すぎる。もつとちゃんと考
えろ」

それは言われても、リビの簡潔での的を射た

答えの先に何があるというのか。そんなトウ
ラスを見かねたのか、リビは言つた。

「動物と人との間には、決定的な違いがある

ではないか」

リビの手は、胸元の古代文字の飾りに触れ

第三章 世界を知るということ

「人は言葉を持っている。言葉によつて意思
を伝えることもできるし、相手の言いたいこ
とも聞き取ることができる。それは面と向か
つた会話だけでなく、こうした文字のやりと
りでも可能だ。このような言語の発達は他の
動物にはみられない。お前が獸と感情や意志
をやりとりできるのは、これとはまた別のも
のだろう。私も水の声が聞こえるから違いは
分かる。あれはなかなか形としてとらえるの
が難しく、時に曖昧だ。そうだろう？」

「……確かに、そうだな」

リビの言う通り、獸たちとは心のどこかが
つながるという漠然とした感覺で、言葉ほど
はつきりしたものではない。

「言葉としての明確な意思表示や伝達は、人
間同士以外には不可能だ。このような言語を

用いれば、もっと平和な道もあるう

「なるほどな……」

「だが実際にはそうはならない。何故だ?

ほら、考え方」

リビに急きたてられ、トゥラスは腕を組んで唸つた。

言葉があれば、意思を伝えたり聞いたり、相談することができる。確かにそれで争いのない平和的な解決はできるはずだ。

しかしそこで和解や合意が得られなかつた場合、最終手段は戦という手段に出るしかないのではないか。そう、市場で自分がそうさせたように。

「……理解し合えなかつたら、結局は戦でど

うにかしようとするつてことか?」

それなりの答えだつたのだろうか。リビは呆れることもため息をつくこともしなかつ

た。

「言葉とは明確なようで、結局のところやはり曖昧だ。人間というのは複雑で、どの動物たちよりも感情の起伏が激しい。好き嫌いはもとより、愛情、喜び、悲しみ、それから厄介な憎悪や嫉妬。もっと色々なものが混ざりあい、この発達した心や思考回路は、言葉と感情をまっすぐには結ばない。どこかでねじれ、本心を隠して全く反対のことを伝えてしまうことも多い。誤解と言うやつだな。他にも、策略などという人間特有の駆け引きが、言葉をどこまで信頼していいのかという

さいきしん
猜疑心を持たせ、疑心暗鬼を生む

リビの説明は難しかつた。それを咀嚼して理解するには少々手こずるところがあつた。

そんなトゥラスに、リビは言い直した。

「言ったことや聞いたことが常に本当に正しいとは限らない。人間は心と頭が発達したゆえに、複雑だということだ」

確かに動物たちは人間なんかよりずっと素直だ。彼らに裏切られたことは一度もない。

「……俺、なんだか自分が嫌になってきた」

市場の戦いも、結局は自分が引き金だった。

杖を見た。

市場の戦いをおかしいと考えていたが、実は無知な自分が原因だった。そうさせる気はなかつたものの、結果として招いてしまったことは事実だ。人間とは複雑で、動物たちとのまつすぐなやり取りとは勝手が違う。

早くも参ってしまいそうだが、リビはまたもやトゥラスが持っているのとは別の考えを教えてくれた。

「人はそのような嫌な面ばかりではない。その複雑さは、時に素晴らしいものを生む。頭

や心が発達した人間たちは、互いを慈しみ合つたり、自分たちはいかにして自然と共にいられるかを考えたり、あらゆる事象に感謝したりすることができる。殺生の循環に生きる動物はない、信仰や風習という文化だ。これもまた人間特有の不思議なものがある」

リビは立てかけていた氣味の悪い生首の

「生贊って、人間か？」

リビは「そうだ」とあっさりと肯定して、杖の上端を指さした。

「あの生首がその歴史を語っている。昔チシユパクでは、神のお告げを聞くために生首を用いたのだ。神は生首の口を借りて人々にあらゆるお告げをすると信じられ、首を斬られた者は神の使者とされ祭られた。その時代、

各地にある。私はチシュパクの民が長年育んできた文化や歴史を絶やしたくはないし、他の文化も同様に思う。それぞれが個性を持ち、その土地の人々の生き方を彩っているのだ。そういう文化という美しさは、我々人間が複雑だからこそ持ちえたもの。私はそんな文化を持つ人間の社会が好きだ」

リビはチシュパクの民らに向けるような穏やかな眼差しで、そう言つた。

第三章 世界を知る
葬られた。青の泉はあのような神秘的な海だから、誕生を意味する場所とされていて。生贊は死後に神のもとへ行くとされ、そこで永久の命を授かるために、青の泉に葬られるのだ

リビは、いつの間にか気味悪いものに見えなくなっていた。知るということは、めまぐるしく視点を変える。だから、人間が好きだと嫌いだと、悪者だとかそうでないというようなことは、まだ答えを出すには早すぎる気がした。答えを出すには、きっともつと様々なものをこの目で見なければならぬ

「しかしその多様性の一方で、実は信仰の多くは太陽神を最高位の神とするところが多いと聞く」

リビは続けた。

「太陽を心のよりどころとするのが人の共通だとすれば、まさしく光は我々の理想だ。転じて闇は軽蔑すべきものの集まりで、それを卑下して人は己の地位と潔白を維持しているのかもしれない。複雑なようで結局同じものに焦がれる単純な面もある」

「純だからな」と面白そうに言った。しかしふと居心地の悪そうな顔つきになつたと思つたら、こちらに一瞥を向けてそっけなくこう言い放つた。

「しかし悪魔憑きだのなんだのと人に闇を押し付けるのはお門違いだな。お前は卑下される人間ではないと思う」

まさか、この自分を気遣つて言ってくれたのだろうか。

リビには珍しく視線を合わせようとした肩をすくめて、リビは自嘲をこぼした。トウラスはリビの言つたことを一生懸命頭で反芻して、浮上した疑問をぽつりともらした。

「それは結局、どこの人間も光を崇拜つてや

りつ対象にして、闇を悪者にしてるってことか？」 例えれば……悪魔みたいに」

リビは文書の読解に戻りながら「人間は單

言つてもリビはかたくなに書物から目を離

そうとしなかった。親切を仇で返したくはないので、今日のところは勘弁してやることにした。

リビの邪魔をしないために、トゥラスは船の甲板に出た。いつの間にか夕空だ。空の半分は星が輝き始め、遠くに薄っぺらな陸が見える。

れる海を、太陽が 橙だいだい に染めていた。

「トゥラスよ」

用事がすんだのか、ようやくチュンオウが戻ってきた。ゆっくりこちらへ歩んでくる。

「旅はどうだ。面白いか？」

チュンオウはトゥラスの横で、トゥラスのように戸の遠くを見た。

「爺さん。俺、もつと色々なものを見なきやいけない。知らなきやいけないんだ。それがやつとわかつてきた」

チュンオウが穏やかな眼差しでこちらを見る。彼の視線はいつも柔らかい。守ってくれているような、それでいて背を押してくれているような。

「あらゆるものを見て感じて、考える力を持つて。世界は広い。そなたの身体は、そのためのものだ」

陽が落ちて、潮風が白い髪を撫でる。世界中を巡ってきたその風に、トゥラスは静かに目を閉じた。